慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一インターナショナル形成過程にかんする一考察 : 後期チャーティストの役割
Sub Title	An essay on the formative process of the first international : the role of the latter-Chartists
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.6/7 (1963. 7) ,p.551(83)- 574(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19630701-0083
Abstract	
Notes	藤林敬三博士追悼特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630701-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

＝資本家は、海外市場と、資源の独占をねらって清国に対する要求を強め、欧米帝国主義列強の清国侵略の一翼に加わったのである。義和団鎮圧に日本軍が参加したことは、このことを示しており、日本がまだ独占体の確立した帝国主義国となっていなかった弱さを、天皇制軍部という「軍事的勢力の独占」と「中国を略奪する地理的便宜の独占」によっておぎなったことを証明した。しかもなお外国の援助なしにいかなる財政力も軍事力ももちえなかったので、中国をねらう列強のうちイギリスとの間に日英同盟を結んでついに帝政ロシアと戦争を開始したのである。この日露戦争は、幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三らの反戦運動を弾圧し、国民のなかにある反戦・厭戦気分をも無視して、一七億円の戦費、そのうち八億も英米の援助によって強行され、ようやく日本が勝利した帝国主義戦争であった。そしてこの日露戦争こそは日本の低賃金構造を形成し、日本独占資本主義を独特な形態でつくりあげる契機となったのである。

（注1）明治三三年「工場統計表」による。
（注2）横山源之助「日本の下層社会」岩波文庫版、二三六頁。
（注3）前掲書一七二頁、二一九頁、二三六頁。
（注4）前掲書七九頁。
（注5）前掲書二三七頁。

第一インターナショナル形成過程にかんする一考察

――後期チャーティストの役割――

飯田鼎

一、一八五〇年における社会主義運動
二、ジョーンズとハーニー
三、国際委員会――第一インターナショナルの先駆者――の結成

一

筆者はすでに、一八四八年の革命における労働者階級の歴史的役割を、このブルジョア革命によって、もっともはげしくその根底をゆり動かされた「ヨーロッパの三大文明国」、イギリス、ドイツおよびフランスについて考察した。[1] その革命の原因として、革命的プロレタリアートの脅威にたいする封建的・絶対主義勢力とブルジョア階級との抱合妥協の勝利があげられるのがつねであるけれども、プロレタリアートの側における階級意識、イデオロギーおよび組織の面での主体的な脆弱性ないし未成熟を指摘しないならば、それは正しい態度とはいえないであろう。

一八四八年の革命以後、一八六四年の国際労働者協会、いわゆる第一インターナショナルの形成までの十数年は、革命に

よって壊滅に瀕した国際的革命的組織の再建のための、ヨーロッパの労働者および革命的インテリゲンチャによる献身という主体的意識的な活動と、一八四八年の革命によって露呈された労働運動の内部的諸矛盾、たとえば各国の資本主義発展の不均等の結果としての労働者階級の組織、階級意識の面での成熟の度合などにおける格差が、一八五〇年代以後のヨーロッパ資本主義の発展そのもののなかで、ある程度縮小せしめられてゆくという客観的諸条件とが次第に結びつけられてゆくという過程のなかに、やがて、イギリスを舞台として国際労働者協会の成立の諸契機が見出されるのである。しかしそれにもかかわらず、全体として社会主義運動は、一八四八年以後、一八五〇年にかけて沈滞期におちいった。マルクスは、共産主義者同盟の分裂を契機とする国際社会主義運動の退潮を促した基本的経済的要因について、つぎのように書いている。

「ブルジョア社会の生産力が、一般にブルジョア諸関係の内部で可能な限り、ぐんぐん発展するこの全般的好景気の時期には、ほんとうの革命は問題となりえない。このような革命は、二つの要因、すなわち現代の生産力とブルジョア的生産関係とが互いに矛盾におちいる時期にだけ可能である。いま大陸の秩序党の個々の分派の代表者たちがさかんに取り組みあい、たがいに恥をさらし合っている種々のけんか騒ぎは、新しい革命のきっかけを考えるどころではなく、反対に諸関係の基礎が目下きわめて安定しており、そしてそれは反動の知らないことだが、きわめてブルジョア的であるからこそできるのである。こうした基礎にぶつかっては、ブルジョア的発展を押えようとする反動のあらゆる試みも、民主主義者のあらゆる道義的憤激や熱烈な宣言も、ともにはじきかえされる。新しい革命は新しい恐慌につづいてのみ起りうる。しかし革命はまた、恐慌が確実であるようにまた確実である。[2]」

マルクスとエンゲルスとは、一八五〇年という時点に立って、ヨーロッパにおけるブルジョア的な生産様式の確固たる支配を認め、一八四八年の革命以後、新しい革命が勃発するとすれば、新しい恐慌の可能性が確実である場合にのみ可能であるとしていると同時に、大陸の亡命者たちの騒々しい行状にある種の軽蔑を示していることがわかる。[3] しかしわれわれは、これらの亡命者たちが、国際社会主義運動の準備期において果した役割を、正しく評価することが必要であると思う。

一八五一年十二月二日、ルイ・ナポレオンによるフランス共和国の簒奪以後、ロンドンは、再び大陸の亡命客の中心地となった。一八五二年当時、ロンドンにおける四、三八〇人の亡命者のうち、二、五〇〇人はポーランド人、二六〇人はドイツ人、一、〇〇〇人はフランス人であった。[4] そしてフランス人の亡命者たちは、種々様々の団体をつくり、すでに一八四八年以前から存在し且つ共産主義者同盟の分裂以後も存在しつづけた労働者教育協会（Arbeiterbildungsverein）やチャーティストと連絡をとっていた。

たとえば、すでに一八五〇年、ルドルュ＝ロラン（Ledru-Rollin）、マッツィニー（Mazzini）、ルーゲ（A. Ruge）およびポーランド人のダラス（Darasz）は、「ヨーロッパ民主主義中央本部」（Comité Central Démocratique Européen）を組織した。しかもこの団体は、イタリア、ポーランド、ドイツ、オーストリア、ハンガリアなどに下部機構をもっており、[5] ポーランド独立の志士コシュート（Kossuth）なども会員であって、[6] そのイデオロギーは共和主義的もしくは民族主義的なものであり、反社会主義的なものですらあった。そしてさらに、フランスの亡命者の間には、ルドルュ＝ロランによって、「革命協会」（La Société la Révolution）が、共和主義的な団体として生まれた。一方、ルイ・ブラン、ピェール・ルルー（Pierre Leroux）、カベー（Etienne Cabet）によって、「社会主義者同盟」（Union Socialiste）が建設されたが、これは社会主義思想の普及と、ヨーロッパにおける社会主義勢力の糾合と連帯をはかろうとするものであり、月刊紙「自由なヨーロッパ」（L'Europe libre）および雑誌「社会主義連合」（L'Union Socialiste）が発刊され、とくに後者には、国際的な色彩が濃厚であったが、しかしこの団体はあまり実際的な運動を行なわなかったといわれる。[7]

ロンドンにおける各国の亡命者のさまざまな団体をみるに、それらは大別して共和主義的なものと社会主義的なものとにわけられるのであるが、これらのブルジョア民主主義＝共和主義者とプロレタリア社会主義との対立は、たんに個人的な葛

藤や不和、感情的な摩擦だけによるものではなく、その根底には、もっと基本的・歴史的な意味がかくされていたことを知らねばならない。

それはすなわち、イギリスをはじめ後進国といわれたロシア、ポーランド、イタリアなどの諸国の亡命者たちが、それぞれの立場において、一八四八年の革命をどのようにうけとめたかということである。恣意的にではなく、彼らがいまぬけ出てきたばかりのその祖国の歴史、資本主義の発展の状態、労働者階級の成熟の程度によって、その判断の基準が相異せざるをえないばかりでなく[8]、しかもそのような民族による差異のほかに、さらにその人間の階級的基盤、革命的体験などが大きな決定的な要素となり、これらにさらに個人的な野望や慾望が結びつくことによって、当時のロンドンに集まった亡命者のなかには、分派やセクトの錯綜した雰囲気が醸成したものとみることはできないであろうか。レーニングによれば、「他国への移住の歴史は、大部分、ブルジョア共和主義的なデモクラシーと革命的社会主義との分裂の歴史である」といっているが[9]、一八四八年以後のロンドンにおける亡命者による結社の動向は、たしかにそうした傾向をもっていた。だが忘れてはならないことは、そうした軋轢や矛盾にもかかわらず、これらの団体の動きのなかから、国際主義の新しい芽がのびてきたのである。さきにのべたルドルュ=ロランとその追従者による「革命協会」に代って、「革命自治団体」(Commune révolutionaire)が、フェリックス・ピアット(Félix Pyat)[10]、マルク・コシディエール(Marc Caussidière)[11]およびボアショ(J. B. Boichot)[12]らによって建設されたのであって、実はこの組織こそ、第一インターナショナルの先駆的形態ともいうべき「国際協会」(The International Association)の建設に積極的な役割を果したのである。

ヨーロッパの国際的な組織の形成は、主としてイギリスを中心に、そこを舞台として行なわれたために、一八五〇年以後、当然、イギリス労働運動における新傾向と、これらの亡命者の団体との関係についてふれる必要がある。「この労働組合運動復活の支配的な特徴は、法的な圧迫にたいする根強い抵抗であった[13]」とウェッブ夫妻も指摘するように、一八五〇年代から六〇年代にかけての労働運動の目標は、一方においてチャーティスト運動の遺産ともいうべき普通選挙権の獲得という点に焦点がしぼられるとともに、労働者階級の直接的な要求としては、組合活動の共済的な側面の強化、すなわち協同組合運動の発展となってあらわれたのである。そこでフランスの亡命者たちの国際的な組織と、これらの諸傾向が、どのように結びつくかが問題とされなければならない。だがその前に、ルイ・ブランやルルーおよびカベーらによって建設された「社会主義者同盟」(Union Socialiste)が解散したのち、その伝統をうけつぐべきものとしての「革命自治団体」(Commune Révolutionaire)がどのように発展したかを考察しなければならない。

一八五二年八月十五日、革命団体の綱領が採択されたが、それは、「第一共和国記念日、九月二十二日、フランス人民への手紙」(Lettre au Peuple Français, 22 Septembre, anniversaire de la première République)というパンフレットの形で発表された。その強調するところは、ジャコバン主義的伝統であり、「十二月二日の体制（ルイ・ボナパルトのクーデター）にたいする公然たる闘いが可能になるやいなや、革命的行動をとるための力を組織するために、故国フランスにおける反対グループと連絡をとるようにすることであったといわれる[14]。そしてこの団体による多くのパンフレット[15]が発刊され、それがさまざまのルートを通じてフランスに密輸入されたのであった。主として、フェリックス・ピアットによって書かれたといわれるこれらのパンフレットの内容は激越であり、フランス本国にも大きな刺激をあたえ、ロンドンの「革命自治団体」と連絡する支部が、各地に秘密のうちに建設された。一八五二年から五四年、クリミヤ戦争の勃発にともなって、この団体の活動は活発となり、武力によるルイ・ボナパルト体制の打倒を計画するに至った。そしてその革命的な蜂起のための資金を集めるために一フラン・クーポンという形で資金を獲得しようとした。そのクーポンは銀行券の大きさで、「民主共和国と普遍的社会主義的共和国、革命的自治団体、自由、平等、友愛、自由醵金、一フラン、人民の聖なる同盟」("République Démocratique et Sociale Universelle. Commune révolutionaire. Liberté, Egalité, Fraternité. Contribution volontaire 1 franc. Saint Alliance des Peuples")

と書かれ、裏には、プログラムの一部が印刷されていた。この革命クーポンは、ベルギー政府に押収され、これによってイギリス政府も、フランス亡命者の活発な活動を知ったのである[16]。

コンミューン・レヴォリュショネールは、ドイツの教養団体（Arbeiterbildungs-verein）やポーランドの社会主義者やイギリスのチャーティストと接触し、とくにジュリアン・ハーニーを通じてイギリスの労働者階級の運動と密接な関係に入ったのであって、かくしてチャーティストとコンミューン・レヴォルュショネールの友好的な空気のなかから、プロレタリア的革命的性格の国際的な組織を建設しようとする動きが胎動しはじめたのである。

（1） 拙稿「第一インターナショナルとイギリス労働組合運動――十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義（その三）」、（三田学会雑誌第五五巻第二号）参照。

（2） Marx und Engels, Gesammelte Werke, Bd. 6, S. 440. 邦訳、大月版四五〇頁、但し訳文は必ずしもこの邦訳によらない。

（3） 一八五二年二月十一日、十二日付のエンゲルスからマルクスへの書簡などにはそのことがよくあらわれている。

（4） A. Müller Lehning: The International Association (1855—1859), A Contribution to the Preliminary History of the First International, (International Review for Social History, edited by the International Institute for Social History, Amsterdam, Vol. III, p. 201)

（5） Lehning, ibid., p. 202.

（6） Th. Rothstein; Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung in England, 1929, S. 260.

（7） Lehning, ibid., p. 202.

（8） Lehning, ibid., p. 203.

（9） Lehning. ibid., p. 203.

（10） ピアットは、革命自治団体の中心的人物であり、パンフレットによって運動をつづけるとともに、劇作家でもあった。一八四九年十一月五日、債務不履行のため国外退去を命ぜられた。しかしその前にスイスに移った。そして故国フランスにおけるクーデターののちは、そこから、ベルギーを経由して、ロンドンに移り住んだ。

（11） コンディェトルは、「人間の権利協会」（Société des Droits de l'Homme）の会員であった。一八三四年、四月蜂起ののち、十年の投獄に処せられ、一八四八年には、立法院の一員となった。そして警察長官に任命された。六月以後、フランス議会は、ルイ・ブランと同じように、彼を起訴したとき、ロンドンへ移住した。

（12） ボアソは、六月革命に参加したために一八四九年に処刑され、スイスへ移住した。彼は、特務曹長であったが、パリにおいて、立法院の一員に選ばれた。だが一八五二年二月、フランス政府の圧迫によって、他の多くの人たちと同じようにスイスから追放され、ロンドンに移住した。

（13） S. and B. webb; History of Trade Unionism, 1920, p. 182.

（14） Lehning. ibid., p. 210.

（15） これらのパンフレットは、書簡の形式になっているものが大部分であった。

以下はレーニングの論文の附録（Ⅲ）「革命自治団体の刊行物の目録」による。（Lehning, ibid., p. 246）

1) Lettre au Peuple Français, Bruxelles, Imprimerie de J. H. Briard, rue aux Laines, 4.15 Novembre 1852, 31 pp. 10.5×6cm.

2/3) Lettre au Peuple Américan. Lettre au Peuple Suisse. Bruxelles, Imprimerie de J. H. Briard, rue aux Laines, 4.14 pp. 9.5×5.7cm.

4) L'Empire, La Famine et la Honte, 12 pp. 11×6.7cm.

5) Lettre à la Bourgeoisie, 36 pp. 10.5×7.2 cm.

6) Lettre aux Proscrits. Le Comité de la Commune Révolutionaire: Félix Pyat. Rougée, G. Jourdain. 24 février 1855.〔L'Homme, 28 mars 1855〕

7) Lettre à la Reine d'Angleterre, Londres 22 Septembre 1855, 15 pp. 11.5×6.5cm.

8) Lettre aux Bonapartistes. Jersey, Imprimerier Universelle, 29 pp. 10.8×6.7cm.

9) Lettre à la réduction du "Times".〔L'Homme. 17 Novembre 1855〕

10) Lettre à Marianne. 24 février 1856.

11) Travail lu (par Rougée) dans la société politique, la Commune Révolutionaire〔L'Homme, 22 et 29 mars 1856〕

12) Aux Prolétaires, Londres, Imprimerie Universelle, 178 et 179 High-Hollborn, 1857. 12 pp. 12×10cm.

13) Lettre au Parlement et à la Presse, 1858. En vente: Librairie Polonaise, 39, Rupert Street, Haymarket. (Imprimerie Universelle) 16 pp. 16×10.3cm, Londres, 24 février 1858.

14) Lettre au Jury, Défense de la lettre au Poriement et à la Presse. 1858. (Imprimé à l'Imprimerie Française, 3, Litchfield Street, Soho.) 55 pp. 11×7.5cm.

15) Lettre aux Mandarins de la France. (Imprimerie Française, 3. Litchfield Street, Soho) 30 pp. 10.5×6.8cm.

これをみてもわかるように、パンフレットは、実にさまざまな階層の人々にあてられているのであって、革命的自治団体の広はんな活動を理解することができる。

(16) たとえば、一八五三年六月三〇日、「ロンドンの外国人事務担当の大臣にあてたロンドンのドルーエ(M. Drouet)の手紙」には、つぎのように書かれている。「わたくしは、若い王子の洗礼の日に、パーマーストンおよびクラレンドン卿(Lord Palmerston et Lord Clarendon)に会った。そして、六月二十七日付の貴殿の電報 No. 294A/3392 の内容について話し合う機会をもった。これらの大臣たちは、その醵金のクーポン(les coupons de souscription)がベルギーで押収されたところの彼の「革命自治団体のロンドンにおける存在については、彼らは知らないと答えました……」。これによってみても、支配者も、国境をこえて情報を交換し合っていたことがわかる。

二

チャーティスト運動は、一八四八年四月十日のケンニングトン広場におけるいわゆる「最後の閃めき」を契機として没落への途を辿るというのが通説となっている。けれどもイギリス労働者階級の国際社会主義運動にたいする貢献という問題視角からするならば、一八五〇年以後のチャーティストの動きは、きわめて重要な意義をもっているといえよう。[1] チャーティスト運動の目標としての普通選挙権獲得の運動は、むしろ「小さなチャーター」("little charter")を要求するブルジョア急進主義運動のなかに、次第に吸収されていった反面、チャーティスト運動の本質的要素たる階級闘争の側面は、とりわけ一八五二年以後は、国際的社会主義運動の情熱の源泉となって、流離の運命に奔弄されていたロンドン在住の各国の亡命者に限りない激励をあたえ、反動勢力によってうちのめされた亡命者たちの士気を鼓舞した。そのなかで、とくにアーネスト・ジョーンズとジュリアン・ハーニーの努力はめざましかった。

ジョーンズが、チャーティストの指導者として注目されるようになったのは、一八四六年二月の、ポーランドの「クラカウの蜂起」(The Cracow Uprising)を記念するために、その翌月、同胞民主協会の援助によって結成された「ポーランド独立回復民主連盟」(Democratic Committee for the Regeneration of Poland)が組織した会合の席上であったといわれる。[2] 「万人は兄弟である」という「同胞民主協会」の会合を通じて、彼は当時の指導的なチャーティスト、ブロンテア・オブライエン、ジュリアン・ハーニーと知り合い、やがてマルクスおよびエンゲルスと相識った。ポーランド独立運動と同胞民主協会との運動の結びつきのなかで、彼がいわば生えぬきの国際主義者[3]として出発したことは注目に値する。

一八四七年十一月、共産主義者同盟の第二回会合において、マルクスを知り、翌一八四八年三月、パリにおいて、ベルギーから追放されたばかりのマルクスと会ったジョーンズは、ハーニーおよびマックグラス(Philip Mcgrath)とともに、革命的熱狂のなかで闘っているパリの民衆にたいして、チャーティストおよび同胞民主協会の挨拶をおくった。マルクスをはじめ、シャッパーなどのドイツの亡命者とも親しい関係にあり、マルクスがそのためにかの歴史的文書「共産党宣言」を書いた共産主義者同盟(Communist League)の内部にも通じていたジョーンズは、チャーティストのなかでも、「宣言」のもつ、歴史的な重要な意味をよみとることのできた数少ないひとりであった。チャーティストとしての彼の特異な地位はそれだけではなかった。彼はチャーティストのなかで、その目標は共通でありながら、その戦術においてむしろ敵対的な関係にあった道徳派と実力派との関係を、たんに相矛盾する二つの勢力として単純に機械的にきりはなして考えるのではなく、楯の両面として、この両者を有機的に把握しようと試みたすぐれた理論家であったのである。[4]

いうまでもなく歴史における彼のこのようないわば弁証法的な理解は、決定的にマルクスに負うところであり、とくにジュリアン・ハーニーを通じてのエンゲルスの影響[5]を無視することはできない。しかもこの両者がやがて理論的には相対立す

る立場におちいったのは悲劇的といわなければならないが、ともかく彼は必ずしもマルクスの主張をそのままうけいれたのではなかった。一八四七年六月、ジョーンズは、ホイッグ党の大蔵大臣チャールズ・ウッド卿（Sir Charles Wood）に対抗して、ハリファックスにおいて立候補したが、その演説のなかには、教会の国家からの分離、自由な教育制度、死刑、救貧法の廃止および長子相続制と直接税制度の廃止、小所有制度の拡大および自由貿易原則の一般的適用などの小ブルジョア的な立場からする主張をかかげたのであった。[6] 一方において、マルクスの影響をうけながらも、他方、イギリス伝来のブルジョア民主主義の根強い支配のもとにあったジョーンズの矛盾を、われわれはどのように理解すべきであろうか。

こうした彼の不徹底な態度こそ、その後の客観状勢の変化とともに、マルクスおよびエンゲルスとの原則的な対立にまで発展させた基本的な原因であるが、ただ忘れてはならないことは、チャーティストとしてのジョーンズの目標は、闘争者としてはきわめて微温的であるが、同時に具体的であり、また多方面的であったため、他の指導的なチャーティスト、たとえばオコンナーのように、一八四八年の「最後の閃めき」によって深刻な動揺はうけなかったという事実である。[7] ケンニングトン広場における運動の崩壊を、内部矛盾、とりわけ道徳派と実力派との理論を無視した派閥的な衝突、原則と個人間の闘争のなかに見出したジョーンズは、これを除去して、チャーティスト運動のための準備委員会を結成した。彼は運動の再興をはかって精力的に活動し逮捕された。[8] 二年間の投獄は、多くのチャーティストの生命を失わせた。みじめな監獄の状態、政治犯と一般犯罪人との無差別の虐待にもめげず出獄した彼は、イギリス資本主義の変貌によって新しい状勢に直面せざるをえなかったのである。

多くのチャーティストは、ケンニングトン広場での衝撃のあまり、その後の状勢の変化にともなって、ブルジョア急進主義と妥協しようとする傾向に走ったのに反し、ジョーンズは、チャーティスト運動を一八四〇年代の形において復活しようとはかったのである。土地貴族、英国国教、教育、新聞および軍隊の改革などにおける、あるいはまた世帯主のみに選挙権をあたえようとする「小さなチャーター」の運動における精力的なブルジョア急進主義者の力を利用しようとするオコンナー[9]に反して、ジョーンズの態度は、マルクスによって批判されたけれども、チャーティストの内部的団結を訴え、チャーターの経済的側面と社会改革とを結びつけたのであって、[10] 五〇年代初頭におけるブルジョア思想の克服、生産協同組合への攻撃、キリスト教社会主義者への反対、このような徹底した態度は、当時合同機械工同盟の書記であったウィリアム・ニュートン（William Newton）やジュリアン・ハーニーとも疎隔を来したといわれる。要するに一八五〇年代におけるジョーンズの姿勢は、マルクス、エンゲルスとの接触を通じての国際社会主義運動への傾斜と、ロシア、ポーランドおよびイタリアなどの被圧迫民族の知識人との交友の結果としての民族運動への関心、壊滅に瀕したチャーティストの再組織のための努力、ブルジョア急進主義のある程度の評価というように、きわめて微妙なものがあり、不統一であったことは疑いえない。従って一言でいえば、この時点におけるジョーンズの態度は、サヴィルがいうように、英国における大衆的社会民主主義政党の建設のための努力であり、イギリス社会民主主義の先駆者としてのジョーンズは、その限りにおいてのみ、マルクスの国際社会主義運動に関心をもったということができよう。

ところで後期チャーティストを代表するいまひとりの指導者ジュリアン・ハーニーの役割について考察する必要がある。ジョーンズがチャーティスト運動の後期、一八四六年にその指導者としてにわかに立ちあらわれたとすれば、ハーニーは、この運動のいわば「草わけ」のひとりであり、ロンドン民主協会を通じて、左派の指導者オコンナーの同志として終始活動をともにした。[11] 晩年におけるオコンナーとハーニーとの不和は、前者が社会の経済的基礎として、競争と私有財産とをうけいれ、小土地所有制度を支持していたのに反し、[12] ハーニーはこれに批判的であり、あくまでもチャーティズムの社会主義的側面を復活させ、社会主義者とチャーティストとの連合をはかることによって、社会民主主義政党の結成を準備しようと企てたのである。ハーニーのその民族主義的・社会主義的な視角からの同胞民主協会におけるはなばなしい活躍は、オコンナ

ーとの不和を増大せしめ、「ノーザン・スター」への寄稿を拒否しようとする彼の態度は露骨となり、国際社会主義運動の評価をめぐっての両者の矛盾は激化せざるをえなかった。かくしてハーニーは、「ノーザン・スター」のほかに、「デモクラティック・レヴィユ」(Democratic Review of British Politics, History and Literature)を創刊し、大陸からの亡命者とイギリスの社会主義者、チャーティストとの交歓の場たらしめようとしたのである。[13]

ハーニーはジョーンズが投獄されている間に、チャーティズムと大陸の社会主義者および民族主義者とを結びつけるのに大きな貢献をしたのであって、「レヴィユ」を通じて、フランスの社会主義者、ルイ・ブランやフーリェ主義者ヴィクトル・コンシデランとも相識り、とくにハンガリアの帝制ロシアにたいする独立運動は、ハンガリアにたいするチャーティストの国際主義的感情を急速に成長せしめるのに貢献した。国内におけるオコンナーの中産階級的傾向にたいするハーニーの反対は、主として「ノーザン・スター」およびレヴィユを通じておこなわれ、中産階級の運動における評価をめぐって、両者ははげしく対立すると同時に、オコンナーの覇権は衰えていった。[14] 大衆的指導者として、外国問題に深い関心を抱き、同胞民主協会での活動を通じて、チャーティズムを大衆的社会主義政党に組織しようとしたハーニーは、オコンナーによって「レッド・リパブリカン」("Red Republican")として非難され、事実彼は、一八四〇年代初頭におけるマルクスおよびエンゲルスとの接触を通じて、科学的社会主義に理解を示していたのである。[15]

彼は同胞民主協会を中心として、チャーティストの大衆をオコンナーの勢力からきり離し、協会の準備委員によって、全国チャーター連盟の再建を企図した。かくしてチャーティズムは、ハーニーを中心とする同胞民主協会の努力によって、英国における最初の社会主義政党として再組織され、つぎのようなプログラムを掲げた。すなわち、㈠土地、鉱山および漁場の国有、㈡すべての人にたいする国家信用の拡大、㈢流通および交換についての適正にして賢明な制度、㈣国民普通教育、㈤困窮者にたいする人間的配慮である。いまやチャーティズムにおけるオコンナーの権威の失墜とともに、[16] ハーニーの指導権は拡大し、チャーティズムとレッド・リパブリカニズムとはいまや同一視されるに至った。そして一八五〇年七月、アーネスト・ジョーンズの釈放は、チャーティズムにおける社会民主主義的勢力に大きな威信を加えた。

以上においてわれわれは、チャーティストとしてのジョーンズとハーニーを、イギリス労働運動と国際社会主義運動を結びつける環として考察した。だがこれらの個性的な二人の指導者は、ともにチャーティズムの末期と国際社会主義運動において、画期的な業績を残しつつも、その両者の協力関係は必ずしも長くつづかなかった。すでに指摘したように、一八五〇年代のイギリスは、チャーティストとブルジョア急進主義者との間における微妙な関係、ギリスト教社会主義者のチャーティストにたいする反動的動き、協同組合運動の労働者階級への浸透、いわゆる労働組合主義への熟練労働者の傾斜など、社会主義運動にとって、まことに複雑にして困難な問題が出現しつつあった。これらの新たな状態を正しく科学的に評価し、そのなかで権威を失いかけたチャーティスト運動に昔日の威勢をとりもどさせることが、この二人に課せられた歴史的使命であった。しかし、これらの新しい諸状勢にたいする両者の判断が必ずしも一致しなかったところに不幸が胚胎していた。少しくその点について追求することにしよう。

一八五一年早々、マンチェスターにおいて、チャーティストの会議が開かれようとしたとき、ジョーンズは、チャーターと社会改革とを結びつけることを提案した。ところが、オコンナーがこれに反対したために、両者の間に論争がおこなわれた。チャーティストに大きな影響をあたえたブルジョア・ラディカルの団体、「全国議会および財政改革協会」(National Parliamentary and Financial Reform Association)は、「世帯主の選挙権」および「小チャーター」によって結びつこうとしていた。[17] 土地改革運動の失敗と、一八四八年のチャーティストの崩壊によって、次第に自信を喪失しつつあったオコンナーは、中産階級の改革者たちの態度に影響され、彼らの力によって自己の権威を維持しようとするために、これに近づこうとする形勢が濃厚となった。しかしチャーティストの組織は必ずしもオコンナーを支持せず、そこで新たに執行部が、オコンナ

ー、ジョーンズおよびホリオーク（Jacob Holyoake）も加わって結成された。そして公開状を発し、オコンナーの反対にもかかわらず、中産階級の同盟（middle-class alliance）をしりぞけるとともに、チャーターと社会革命との結合、いわゆる「チャーターとさらにその上にあるもの」（"Charter and Something more"）の立場で明らかにした。

オンコンナーは執行部のなかで政治的に次第に孤立するようになった。やがてマンチェスターの会議においてジョーンズは、オコンナー派のはげしい反対に直面し、[18] 失敗したのであるが、その後ロンドンにおいて一八五一年三月三一日に開かれたチャーティストの会議では、一八四八年以後におけるもっとも重要な政策が掲げられたのである。その決議は、チャーティストのみが社会改革の担い手であることを確認した上で、戦術的には、㈠政治権力の重要性の強調、㈡都市および農村におけるチャーティスト運動の必要を強調した。そしてつぎのような綱領を掲げたことは、チャーティスト運動の復活が、労働者階級の具体的な要求と結びついていたことを物語っている。[19] すなわち、①土地国有、②教会の国家からの分離、③義務教育、④賃金奴隷の廃止と協同の原則の発展、⑤労働問題の解決、⑥国家による老齢者の保護、⑦労働権、⑧土地および資本財にたいする課税、⑨国債の廃止、⑩軍隊の民主化、新聞税の廃止、これらはいわば「社会民主主義国家の青写真」[20]（a blueprint for the social-democratic state）ともいうべきものであった。

ジョーンズは一八五一年五月三日のチャーティスト会議の解散後、いままで「ノーザン・スター」、「レイノルズ」（Reynolds）およびハーニーの編集による「レッド・リパブリカン」[21]（Red Republican）、「フレンド・オブ・ザ・ピープル」（Friends of the People）の欄を利用していたが、いまやオコンナーとの関係が悪化し、ノーザン・スターの編集から遠ざけられたことを知って、新しい機関紙「ノーツ・トウ・ザ・ピープル」（Notes to the People）を発刊した。ジョーンズの最良の論文があらわれたこの新聞を通じて、ジョーンズは、マルクスおよびエンゲルスと密接な関係に入ったのであって、そこにはマルクス主義の根強い影響をよみとることができる。[22]

彼の筆致は、十九世紀の痛烈な評論家、農業改革者ウィリアム・コベットのそれを想わせるものがあり、中産階級にたいする攻撃は、ことさらにはげしかったが、それはまた一面において、ジョーンズをして労働組合運動と反体制的な労働者階級運動との関係の理論的な把握を曇らせる結果となった。すなわち、当時ブルジョア急進主義を憎悪する余り、その理論的影響をうけた労働組合運動を敵視し、その役割を軽視し、もしくは不当に低く評価するという戦術的な誤謬におちいった。一八八〇年のハイドマンと同じく、労働組合におけるストライキによる精力の浪費、熟練労働者の政治からの遊離、そして彼らの政治への参加の拒否を理由に、はげしく労働組合を非難したのであった。[23] この当時、イギリス労働運動史上、画期的なストライキが行なわれたが、それは合同機械工同盟（Amalgamated Society of Engineers）が、機械工、鍛冶工、水車大工、鋳型工などを中核として形成され、総資本対総労働の対立の感があったが、[24] ジョーンズの努力にもかかわらず、もはやチャーターは機械工にたいし何らの印象もあたえなかった。政治的社会的改革を信じようとしない労働組合、およびその指導者にたいする不信は、チャーティストの左翼をして、独断的党派主義におとしいれた。このような矛盾、すなわち一方においては比較的高い賃金をえている熟練労働者の政治的無関心、他方窮乏化した大衆を奮起せしめえないというチャーティストの苦悩は、組合にたいする不信を深め、かくして労働組合と社会主義者＝チャーティストとの対立は深刻化せざるをえなかった。

ところでハーニーの立場は、ジョーンズと異なっていた。イギリス労働者階級の国際主義を代表して、亡命者の間に特異な地位をしめていたハーニーは、ヨーロッパにおける革命の望みがうすれるにつれ、彼らの間に対立が激化しつつあることを知った。一八五一年までに統一の様相はきえた。[25] マッツィーニ、ルドルュ＝ロラン、アーノルド・ルーゲ（Arnold Ruge）らの指導のもとに結成された中央ヨーロッパ民主委員会（Central European Democratic Comittee）とともに、ロランとルイ・ブランとの間に対立が生じはじめた。[26] それと同時にマルクスとエンゲルスは、亡命者たちの共和主義および社会主義の双方

にたいして対立の態度を明らかにした。[27] だが、同胞民主協会による、しかも非常に多くの移民の代表者が出席した新年宴会において、「共同の敵に対抗する一大方陣」[28] (one grand phalanx of opposition to the common foe) をつくるために団結することを訴えるハーニーの立場は、勢い鮮明を欠くものとなり、マルクス、エンゲルスと関係を保ちながら、同時にブルジョア民主主義をも援けようとするいわゆる「右路線」(“right track”) を歩まなければならなかった。

亡命者 (emigre) の問題に頭を悩ますことの愚を笑うマルクスとエンゲルス[29]にとって、ハーニーの努力は異常なものにみえたし、マルクスやエンゲルスと同じ次元において、ルイ・ブランやプルードンを評価しようとするハーニーの態度は、無原則にひとしい機会主義とも映じたのも無理ではなかった。ハーニーはマルクス、エンゲルスと不和におちいったばかりか、ジョーンズとも協同組合運動や労働組合運動にたいする評価において大きな懸隔をみせるようになり、とくに労働貴族層の問題をめぐって、ジョーンズとハーニーは別々の途を辿ることとなったのである。

ハーニーは、社会主義的政治運動と労働組合運動とを結びつけようとする努力の過程で、たとえば協同組合運動の有力な指導者ヤコブ・ホリオークのような中産階級的な思想の持主と親交を結んでいるが、[30] ジョーンズは、ホリオークが全国憲章連盟 (National Charter Association) のメンバーになることに反対して、執行委員を辞することを敢えてしたのである。[31] それだけではない。すでに運動におけるさまざまの失敗と挫折によって、次第にチャーティストの戦列を離れ老衰しつつあったオコンナーは、一八五二年のはじめ、十数年にわたってチャーティストの導きの星であり、労働者を革命的に教育しつつあった輝かしい伝統を有する機関紙「ノーザン・スター」を、この運動に全く関係のないウィリアム・ライダー (William Rider) に売り払い、運動の敵手にたいしてさえ、その紙面を解放するに至った。しかも一八五二年三月二〇日号から、「ノーザン・スター」はノーザンを削除し、四月二四日号から「スター・オブ・フリーダム」として、ハーニーが編集者となった。この事件は、ジョーンズとハーニーとの分裂を、いまや決定的ならしめたのである。[32]

以上のようにチャーティスト運動は、一八五二年の初頭に、すでに衰滅の最後的段落に入りつつあった。ジョーンズはそのなかで、チャーティズムの復活を国際社会主義運動のなかに見出そうと努力したのである。チャーティストの労働運動において果した偉大な役割が、その後の国際労働運動の形成、とくに第一インターナショナル形成に、いかなる歴史的貢献をなしたか、この点について考察することにしよう。

(1) 小川喜一「チャーティズムの『終焉』にかんする一試論」(大阪市立大学経済学年報第十五集)

(2) Max morris; From Cobbett to the Chartists, Nineteenth Century Vol. I. 1815—1848, Extracts from contemporary sources edited by Max Morris, 1948, pp. 251—252.

(3) John Saville; Ernest Jones, Chartist, 1952, pp. 94—95.
一八四七年二月二十二日、ロンドンで開かれた一八四六年二月のクラカウの叛乱を記念する集会の席上で行なった演説の一節につぎのような文句がある。
「平和は高価な賞品です。しかし奴隷はあまりにも貧しいので、闘うこと以外にこれを購うことはできません。わたくしはいま、ポーランドに剣を捨てることを命ずるために立っているのではないということを瞬時も忘れてはなりません。なぜならば、わたくしは、チャーティストとして、英国において平和の論理をいっぱいに吸っていますから。闘うことが人民の義務となるような状況というものはあるものです。そしてもしあなた方イギリス人が、ポーランド人と同じような立場におかれるならば、わたくしは、あなた方に、この首都ロンドンのあらゆる街角で闘うことをよびかけるでしょう……」(Northern Star, February 27, 1847, cited in Saville's.)

(4) ジョーンズはつぎのようにのべている。
「いままで多くのことが、道徳派と実力派についていわれてきた。しかしわたくしは、その両者が区別されているのをきくことを好みません。道徳派とはそれによって何を意味するのでしょうか？ それは正しい状態にあることを意味します。そして実力派とは何を意味するのでしょうか？ それはその権利を確立する権力をもつことを意味します。それゆえにそれらは、一本の桜の木の二つのさくらんぼなのです……」(Northern Star, February 26, 1848, cited in Saville's, p. 27.)

(5) Gustav Mayer; Friedrich Engels, eine Biographie, erster Band: Friedrich Engels in seiner Fruhzeit, Zweite, verbesserte Auflage, 1934, S. 275.

(6) Northern Star, July 3, 1847, (cited in Saville's, pp. 95—96.)

（7） Saville; ibid., pp. 28—30.

（8） Saville; ibid., p. 102. 一八四八年六月四日、ジョーンズは、ロンドンのビショップ・ボナーズ・フィールドでの大衆集会において演説したが、その内容が問題とされ、二日後に捕えられ、二年間の投獄に処せられた。その演説の一節に、つぎのような文句がある。

「わたくしが云わんとするすべては、つぎのようなことである。すなわち、あなた方の旗のもとにしっかりと立て、チャーター、チャーターそのものからひるむな——どっちつかずの人間の馬鹿げた行為を気にかけるな——派遣軍に目もくれるな、そしてもしあなた方が、この集会に近づいてくる——この集会に向って行進してくる——警官隊をみるならば、スクラムをくんで、しっかりと立て。走ってはいけない、走る人々には危険がともなうが、団結する人々には安全がある……もし彼らが一撃を加えようとするならば、現在の法律は邪悪なものではあるけれども、平和的な市民が、彼らの義務を平和的に履行する場合に、彼らを攻撃するような人々を処罰するほど充分峻厳である……」(Northern Star, June 10, 1848, cited in Saville's, pp. 102—105)。この一節を含むジョーンズの口調は、平明且つ平和的以外の何ものでもないのであって、当局は陰謀によって彼をおとしいれたというほかはない。

（9） Saville; ibid., pp. 43—44.

（10） 一八五〇年七月九日出獄したジョーンズは、「人民へのよびかけ」というチャーティストにたいする公開状を出したが、そのなかで、つぎのようにのべているのは印象的である。

「この主義を擁護する場合に、わたくしは、チャーターの実践的および社会的結果を、公衆の前に提示することが必要であると信ずる。わたくしは、労働者階級のうちのあまり啓発されていない部分の人々が、社会的な救済というものの、のうちにそのできるようにされるのでなければ、政治的な諸権利にほとんど共感を示さないと信ずる。わたくしは、彼らが政治的な権力と社会改革との間をつなぐ鎖というものを、まだ充分に理解していないと信ずる。あなた方が、その側に、大きなパンの塊をおくのでなければ、自由の帽子を彼らの前においても、あまり意味がないのだ……」(Northern Star, August 10, 1850, cited in Saville's, p, 111.)

（11） G.D.H. Cole; Chartist Portraits, 1941, Chap. X.

（12） オコンナーは、一八五二年、その死に至るまで、多くの同志の鋭い批判にもかかわらず、その主張をかえなかった。

（13） A. R. Schoyen; The Chartist Challenge, 1958, pp. 190—192.

（14） A. R. Schoyen; ibid., pp. 194—195.

（15） Gustav Mayer;ebenda, SS. 274—275.

（16） 拙著「イギリス労働運動の生成」（一九六二年）三五六頁以下参照。

（17） これについては、Francis Elma Gillespie; Labour and Politics in England, 1850—1867, 1927, pp. 63—76, 76. 以下参照。

（18） Saville; ibid., Appendix III 参照。

（19） Saville; ibid., p. 138. (23) The Chartist Programme 参照。

（20） Saville; ibid., p. 45.

（21） レッド・リベラリカンは、一八五〇年六月二十二日から、一八五〇年十一月三十日までに二十四号を出し、十一月号には、共産党宣言が英訳されて掲載された。ひとつには、それが印紙条令違反であるところから弾圧される危険性と、いまひとつは、その名前が善意の寄金者をおそれさすところから、「人民の友」(The Friend of the People) という名前にかえた。

（22） ジョーンズは、いわゆる労働価値説の把握において、マルクスの影響が深刻であったことを示す論文を書いている。(Saville, ibid., pp. 146—148)。

（23） H・M・ハインドマンにおける労働組合運動の役割についての軽視については、C. Tsuzuki; H. M. Hyndman and British Socialism, 1961, H. M. Hyndman; Historical Basis of Socialism, 1883, Chapter 6—8.

（24） Jefferys; Story of Engineers, 1946, Ch. 2.

（25） Schoyen; ibid., p. 212.

（26） Schoyen; ibid., p. 212.

（27） Marx und Engels, Gesammelte Werke, Bd. 8, S. 568.
邦訳（大月版）第八巻五七八頁。

（28） Schoyen, ibid., p. 213.

（29） としてもマルクスとエンゲルスは、移民や亡命者の問題に無関心ではなかった。ドイツ人亡命者救済についての檄を発してその救済を訴えている (Gesammelte Werke, Bd. 7, S. 545. 邦訳五五四頁)。

（30） George Jacob Holyoake; Bygones with Remembering, Vol. I, 1905, pp. 112—113.

（31） Schoyen; p. 221.

（32） Saville; pp. 48—49.

三

一八五二年五月十七日、アーネスト・ジョーンズは、チャーティスト運動の再組織を目的として、マンチェスターにおいて会議を召集した。これより先、ジョーンズの新聞「ピープルズ・ペーパー」(People's Paper)が発刊され、再組織のための準備がととのえられたのであるが、これは「人民の友」(Friend of the People)は、すでにチャーティズムの機関紙としては不適当なものとなりつつあったのにたいして、発刊されたものである。ハーニーの一八五〇年代以後におけるチャーティスト運動からの離脱[1]にたいして、ジョーンズは、チャーティストの革命的情熱を、国際社会主義運動への参加、それへの大衆のエネルギーの結集をはかり、またそれによってチャーティズムそのものの復位をはかろうとしたのである。彼は、「ピープルズ・ペーパー」を利用し、社会の機構を分析し、説明し、必要な組織を達成するための手段たらしめようとした[2]。すなわちジョーンズはその創刊号に、一八五一年のチャーティスト大会の理念とプログラムとを強調したのである[3]。従って中産階級との同盟を完全に拒否し、マルクスの支持をえることができた[4]。

かくしてマルクスの協力のもとに、一八五二年五月十七日、マンチェスターにおいて、チャーティストの再組織のための会議が開かれたのであって、ジョーンズはここで積極的な役割を果し、チャーティズムの最後の段階の代表的な指導者のひとりとなったのである[5]。ガムメージ(R. G. Gammage)、フィンレン(James Finlen)ロバート・クラウ(Robert Crowe)およびロビンソン(Abraham Robinson)などとともにその執行委員となって、一八五二年の総選挙においては、彼は再びハリファックスにおいて闘ったが敗れた。その後のジョーンズの活動は、もっぱら「ピープルズ・ペーパー」を中心とする言論活動に重点がおかれ、「ノーザン・スター」に代って、これを運動の代表的機関たらしめようとしたのである。彼は、労働組合とも可能な限り、密接な関係をつくり上げようとして、全国労働組合連合[6](National Association of United Trades)は、その機関紙に、チャーティストの活動を報じたといわれる。

しかしそうしたジョーンズの献身的な努力にもかかわらず、チャーティスト運動は益々衰えていったが、しかし一八五二年、合同機械工同盟の闘いをはじめ、一八五三年には、全面的なロック・アウトに突入したストライキの模様は、「ピープルズ・ペーパー」に報道され、全国的に大きな反響をまきおこした。総資本対総労働の闘いといわれた一八五〇年代の労働争議は[7]、かつては容易に和合し難かった労働組合とチャーティストとの関係を多少とも改善するかにみえた。このようにして、ジョーンズの胸の中には、「労働者の議会」(Labour Parliament)の思想が生まれはじめたのであって、その具体的なプランを、「ピープルズ・ペーパー」紙上に発表したのである[8]。一八五三年十一月十二日、ピープルズ・ペーパーにおいて「労働議会の構想が提案され、十一月二十日、マンチェスターで開かれた会議では、アーネスト・ジョーンズとガムメージを中心とした大衆運動委員会(Mass Movement Committee)が、主としてマンチェスター在住のチャーティストによって結成された[9]。

この計画は、後期チャーティスト運動の転機をなしたものであったということができる。なぜなら一八五〇年代におけるチャーティストの再組織は、一八四八年以前における運動の弱点、たとえばその主力を手織工を中心とする不熟練労働者に負うという組織の上での脆弱性を克服するために、労働組合をはじめひろく一般大衆にむけられていた[10]。しかしすでに指摘したように、労働組合運動にたいする彼の絶望、そしてまた労働組合の指導者の側におけるジョーンズにたいする警戒は、この運動が、円滑に発足することをさまたげたのである。この計画の挫折は、ひとりジョーンズの活動における一転機であるばかりでなく、後期チャーティスト運動にとってもまた一エポックを画するものであったということができるであろう。だがジョーンズは、こうしたチャーティスト運動の停滞にもめげず、むしろこの革命的伝統を生き永らえさせるために、国際社会主義運動に精力的な活動を展開した。

チャーティスト運動と同胞民主協会の衰亡にもかかわらず、国際的連帯の精神は死滅するどころか、やがて第一インター

ナショナルの原形ともいうべき形をとりはじめた。[11] そして国際政策問題にかんするヨーロッパの労働者大衆の関心を復活させるという点で、もっともあずかったのはクリミア戦争であった。[12]「ヨーロッパの憲兵」であり、また「諸民族の牢獄」としして、民主・民族主義運動を弾圧しつづけた帝制ロシアとの戦争に、ロシアと結ぶ反動的なナポレオン三世にたいするはげしい憎悪を、亡命者の社会主義者・民族主義者および民主主義者の間にうえつけた。

一八五四年の秋、ナポレオン三世のクーデターの犠牲者バルベ（Barbès）を迎えるために、バルベ歓迎委員会（"Welcome and Protest Committee"）が結成され、それははからずも丁度ロンドンを訪問することになっていたナポレオン三世にたいする抗議となったのであるが、[13] ジョーンズは、一方においてチャーティスト運動によびかけると同時に、大陸の民主主義者と協同関係に入ろうとした。

この段階において、チャーティスト運動は、それ自体の力によって組織を再建する力をもたなかった。と同時にイギリス労働者階級の運動そのものが、すでに国際的な運動の一環として考察されなければならない段階に次第に入りつつあった。ひとつには、ヨーロッパ資本主義の発展が、イギリスを先頭として、ドイツ、フランスおよびアメリカ合衆国のように、程度の差こそあれ、一応ブルジョア民主主義革命の洗礼をうけた国々と、ロシア、イタリアなどのように近代化の方向に向いながらもなお、専制政治が支配的であった国々との間では、大衆的な運動は、非常に異なったものとしてあらわれざるをえない。すなわちイギリスを中心とするヨーロッパの三つの先進国においては、労働組合主義者と社会主義者との間に矛盾をはらみながらも、一種の連帯関係が生まれつつあったのに反し、東ヨーロッパの後進国においては、民族解放運動が抵抗運動の主流をなしていた。しかしそのような相異にもかかわらず、イギリスの労働者階級を中心として、プロレタリア国際主義の最初の試みが、一八五〇年代になされたことは、この国の社会主義運動や労働運動の先進性を物語っている。と同時にそれは、「世界の工場」としての優位の結果でもあった。イギリス資本主義の黄金時代と呼ばれたヴィクトリア時代の隆昌を象徴するかのような一八五一年の大博覧会の開催は、世界の工場そして世界市場の独占という好条件に恵まれたイギリス・ブルジョアジーの富を誇示したのだが、それらの諸条件は、強固な労働組合と意識の進んだプロレタリアートの存在を世界の人々に告げ知らせ、それらを中心として各国の社会主義者・民主主義者および民族主義者を国際的に結びつける機運をあたえたのであった。一八五〇年から六〇年にかけてのイギリスを基軸とする世界市場の形成は、同時にまた世界のプロレタリアートにおける連帯の精神を生み出す基盤でもあった。

一八五五年一月二十一日の集会において、フランス二月革命を記念するあらゆる国々の民主主義者の集会を開くべき決議が採択された。まず、フランスおよびイギリス人による準備委員会が開かれ、アーネスト・ジョーンズが議長となった。ジェームス・フィンレン、ウィリアム・スロウカム（William Slocombe）およびアルフレッド・タランディエがその委員会のメンバーとなり、フランスおよびイギリスの代表から成る代表団を、他の国の組織へ派遣し、それぞれの国の五人のメンバーを、新しく結成された委員会に席をしめるように任命することを要請することを決議した。[14] これに答えてドイツ人がその代表者を派遣し、スペイン、イタリア、ポーランドもその代表者をおくってきたが、マッツィニーはその参加を拒否した。一方、アレキサンダー・ゲルツェンは協力を約束した。かくして一八五五年二月二十七日、ロンドンのセント・マーティンス・ホールにおいて、一八四八年の革命を記念して、未曾有の大規模な、民主主義擁護の運動がおこなわれた。

このようにして、一八四八年以後一八五五年の国際委員会の成立までの数年は、イギリスを舞台として展開された国際主義への動きが、民族、体制および階級の問題を媒介としてそれらの矛盾も、もっともはげしくあらわれたのであった。このような三つの問題にかかわる矛盾は、ヨーロッパにおける三大文明国におけるそれぞれの資本主義発展の特殊性と相まって、第一インターナショナル形成のあらゆる局面において、その組織的脆弱性の根本原因となったことは銘記されねばならない。

(1) Schoyen; Chartist Challenge, Chapter IX.
(2) Saville; ibid., p. 195, Emigration and the Labour Surplus.
(3) Saville; ibid., pp. 120—128.
(4) マルクスの「ピープルズ・チャーター」への寄稿が増加したといわれる。
(5) Gammage; History of the Chartist Movement, 1837—1854, 1894, p. 386.
(6) この団体は、職能別労働組合の全国組織であったとみられるが、その活動については、あまりふれられていない。(Webb; History of Trade Unionism, 1920, p. 277.)
(7) これについては Webb; History of Trade Unionism, 1920, pp. 213—217. を参照。
(8) Appendix IV. p. 264 (Saville's) 参照。
(9) Saville; p. 264, Appendix IV 参照。
(10) Saville; pp. 274—275, Karl Marx; Letter to the Labour Parliament (Appendix V) 参照。
(11) Steklоff; History of the First International; p. 26. 改造文庫邦訳四八頁。
(12) Saville; ibid., p. 215. 一八五四年十二月四日のロンドンの科学会館 (Hall of Science) における演説「国際主義について」(On Internationalism) People's Paper, December 9, 1854. を参照。
(13) A. M. Lehning; ibid., p. 212.
(14) A. M. Lehning; ibid.. p. 213.

日本における「企業集中の理論」

野口祐

一、問題の領域と限定

現在の段階において、日本における「企業集中」の問題を分析することは極めて重要な意味をもつと云ってよいであろう。

それは、「自由化」(＝貿易、為替及び資本取引の自由化) の規制により、企業集中が一層確定的になってきたからである。ここでは、さしあたり、そのような条件の中で問題となりつつある現段階の日本の「企業集中」についての内容、特質、矛盾について明らかにしておくことは、単に日本のビッグ・ビジネス＝独占企業の企業行動のメカニズムを把握するためにも、また日本資本主義の現段階の位置をはっきりさせるためにも極めて大切なことと見なされるからである。

何故なら日本資本主義体制の中軸を形成する巨大企業の経営行動は、国家を規制する (Government and Business Relations) だけでなく「企業集中」のなかではじめて正確にとらえられるものだからである。

このような、重要な意義をもつ日本の「企業集中」の実態とその理論的把握は現実においてあまり究明されていないと云